



八戸学院光星高3年

平山 颯人さん(18)

「響～小説家になる方法」という漫画を読んだから、小説を読むのが楽しくなり、英語の読書に興味が増え、日本語で読む小説も好きになりました。英語の読書は、言葉の面白さや、作者の考えが伝わってくる感じが好きです。英語の読書は、言葉の面白さや、作者の考えが伝わってくる感じが好きです。

私は以前まで本というものに全く興味がないう人間だった。しかし、ある人物を知ってから、本への概念がすっかり変わってしまった。その作家の生きざまに惚れてしまったのだ。本を読めば、いつかはこんな人になれるのかなと思いつつ、小説を読み始め、高橋弘希さんの「送り火」に出会った。

いじめへの感情が交錯

この小説は、父の転勤により東京から東北地方の町へ引っ越し、廃校寸前の中学校へ通うことになった主人公・歩への「田舎の洗礼」が描かれている。ある少人数のクラスメイト、濁点が多く訛り多き方言、生ぬるい風と田舎風景。読み進んでいくと、津軽が

文学にアプローチ



「送り火」

高橋 弘希著
2018年発行
(写真は文藝春秋「文学界」5月号)

私の一冊

誰もがグループをつくり、リーダー格が現れ、いじめられ役の標的ができる。そして、他は傍観者という構図が出来上がる。リーダー格は暇つぶしで花札や賭けなどをして標的をいじめ、残りの傍観者たちが囁し立てたりいじめたりして、恐ろしい結末へと繋がっていく。

この本を読んでいくと、田舎ならではの少人数のクラスの中で、人間関係の不自由さ、いじめの理不尽さに気付く。少人数の学校で、クラスのグループから仲間外れにされたら、田舎から離れない限り一生独りぼっちだろう。そのつまらない人間関係の狭さが「不自由さ」だ。そして、読み進んでいくと、いじめられ役の復讐が始まる。怒りの矛先は、いじめていたリーダー格の少年ではなく、いじめを傍観していた歩たちへと向けられていく。傍観者たちは、復讐の矛先を自分たちに向けたことに対して、「理不尽」だと叫ぶ。いじめの標的にされた側の視点と、いじめを傍観していた側の視点、いろいろな角度から見たいじめを取り巻く感情が交錯する小説であると感じた。